

講座、自主ゼミ、学習会等教学体系の内容的具体的プランを自主管理下に徹底的に討議する場として研究室を創造しようとするものである。

だが、断じてそれは案だけのものではない。我々は我々が考え得るすべての意見、イメージを提出させ自主管理下徹底的な討論を継続するのだ。白熱した議論の継続の存在は即目的に大学革命運動の組織となり得るのである。

旧立命館の幻想の中で容易に自己の立場を容認し過ぎていた我々の意識はあまりにも、与えられる教育に泥みきつていて、我々の継続された議論は、そうであつた我々の存在基盤にまで降下し、重たき足枷を對象し得たものでなくてはならない。その内容は没主体的な学生に対しては、彼の感性と理性をして、その没主体をたちまち奮然の形で内在化させるものとなる。また我々の創造の原点を論議することのできる反革命分子も堂々と参加すればよい。我々の自主管理の場は全ての人々に開放されているのである。

我々の運動は、研究室自主管理の内容とそこから生まれる展望を生命線とする。

我々はすべての文学部専攻から全学的段階へ、すべての人々を結合した運動体を組織し、その展望を実現化すべきであらう。さらにはいまだ沈黙の中におり覺醒せざる者は早急にその眠りから醒めよ。学友諸君！自ら原点を對象化せよ！自ら組織化せよ。

全日本史闘争委員会

日本史クラス有志（民青系）

学友のみなさん、日本史クラス員のみなさん！職員から職場を奪い、試験の延期をはじめ、大学運営のマジをもたらしているこの中川会館封鎖を許しておくならば、後期試験入学試験の中止、卒業延期に発展し、学生浪人の発生さえあやぶまれます。

寮問題は、学校当局がこれまで寮生の切実な要求に対し、正しく対処してこなかった点に第一の問題があるが、さらに重大な問題は、そうした大学当局の誤まり不十分さを口実にした封鎖は学生、教職員、教員の利益に全く反する不当な行為であることです。寮連合の八項目要求の中には、正当な要求も含まれているが……必ずしも正しくない。

八項目要求と、理事会への抗議という中川会館封鎖は、民主主義のルールからいって全く不当なものです。私達は、ただちに中川会館封鎖を解除し、寮問題をクラス討論、学振懇、全学協での検討、決定という正しい方法で解決していくべきであると思います。

我々立命館人の共同の財産であり、大学運営に極めて重大な影響を及ぼす中川会館の封鎖を解除するには三つの方法しかありません。

第一は機動隊の導入です。第二は、彼らの暴力に屈服し、要求を無原則的にのむことです。第三は、大学人自らの手によつて実行行使も辞さないだけの断固たる行動に立ち上り、封鎖解除することです。第一は東大で、第二は同志社に見られるごとく、真の解決にはならない。残るは京大のごとく、第三の方法あるのみ。

全ての学友、日本史クラス員のみなさん！

中川会館封鎖に反対し、全大学人の団結した力を基礎に、あらゆる英智をこめて断固として、早期に封鎖を解除させようではありませんか！

学友のみなさん、日本史クラス員のみなさん！

日本史専攻ではもう一つ重大な問題が起つています。それは一部の学部学生、院生による日本史研究室の「自主管理」の問題です。

そもそも日本史研究室は、教官、院生、学生の三者が利用するものであり、その管理、運営に関して三者があたることは当然のことです。私達は、クラス員のみが研究室を利用できるように、教員、

院生、学部学生の三者の各々の正式機関による三者共同管理を確立することを提言します。

学友のみなさん、日本史クラス員のみなさん！

「全共闘」一派の暴力に属することなく、大学当局の暴力屈服主義を許さず、断固我々の手で中川会館の封鎖を解除するため一層奮闘しようではありませんか。そして「全共闘」一派による清心館封鎖、全学封鎖のたくらみを粉砕し、日本史共同研究室をクラス員みんなが利用できるようにするため、三者共同管理体制を確立しようではありませんか！

二月五日（水）

経済学部学生大会開かる。経済学部選挙委員会の提案（民青執行部追放学部ストライキ突入）は、過半数に二票たりず保留となるが、執行部提案は各項目ともすべて否決される。大会議長団は、経委系学友が占め、大会は、民青執行部の逃亡で混乱のまま終わる。産業社会学部の大会も同日開かれ、議長選挙の段階で、産社闘争委系が支持をえると、民青執行部は、流会を謀つて、議場から逃げようとした。これを阻んで、大会を続行した産社学友は、執行部罷免を中心とする産社闘争案を可決する。

一方、当時、最も闘争に立ち遅れていた理工学部における学生大会では、理工闘争委員会は、多数を占めるところとならず、全共闘の圏外にある無党派運動！理工クラス連合が、中間的な議案（民青執行部リコールを含む）を可決させた。

かくして、全員加盟制自治会を標榜する代々木、民青は、自分の存在理由を失なつてしまふ。形式的にも多数派を形成している学部自治会は、文目を残すのみで、その文目も、独自で大会を開議する力はなく、学友会執行部（委員長小畑君は経自出身）は、その主軸たる経自のように空中才の運命をまづばかりだった。七日に予定されている法学部大会は、法学部教授会が「五者共同政治局」とおだなされる代々木の牙城であることも影響して、決議の如き焦点としてにつめられていった。

-28-

二月六日（木）

末川議長主催の懇談会が開かれる。同書きなしの一人の先達として末川博先生、個人声明を出す（二・七声明）

その日、ガタガタの文学部教授会執行部の代行代理体制は、無謀にも、学部四回生の卒論の試問を強行しようとするが、粉砕される。六日は、又、入学願書の切日であり、教学条件の崩壊した日本史専攻も含めて、きわめて高い競争率となる。この事実が、大学闘争の困難性のあらわれと言えらる。

【資料】 全立命館人諸君への訴えと願い

わが立命館大学は、いま、重大な危局に立っている。この事態の招来について、私は、不敏と怠慢の責任を痛感しているのであるが、当面、この危局を転じて大学前進の契機とするように、全立命館人諸君が協力せられることを訴えかつ願うたいのである。

戦後二十有余年、わが大学は、平和と民主という理念のもとに、教学と経営の両面で新しい路線を進んできた。たとえば、研究教授陣では学閥を排して人材を広く天下に求め、経営の面ではすべてをガラス張りにして暗い影のないことを期し、また教育の場としての純潔を保つために情実因縁金銭により入口入学を厳禁し、さらに学部長理事制によつて教学専重の線を固めるなど、諸般の施策をとつてきた。そして学生諸君の自主的な人間形成のために広範な自治活動を認め、また今日やかましい学生参加にも通じる総長選挙への学